

第88回麻布獣医学会 一般演題10

猫の口内炎治療に対する選択薬の一考

松田 美和子

松田獣医科医院：山口県

<はじめに>

猫の難治性口内炎は日常診療において度々遭遇する疾病である。治療においては副腎皮質ホルモンを主体としたステロイド製剤の投与によって効果の見られる場合が多いが、経口投与困難な猫や連日の経口投与を嫌う飼い主も多い。そして処方する側の連続的なステロイド製剤投与に対する懸念もある。今回2種の非ステロイド製剤の経口投与による効果の比較、経口投与困難な猫に対してステロイド製剤注射の投与回数の減少を目的とした併用薬との効果を比較してみた。

<投与別の分類>

難治性口内炎の猫22頭を経口投与可能群、経口投与困難群と困難群の一部を注射投与した群に分類した。

- ① 2種の薬剤とも経口投与可能群8頭においてクリンダマイシン(5~25 mg/kg,bid)とアジスロマイシン(7~15 mg/kg,sidその後3日ごとに投与)を10日間続け効果を比較した。
- ② クリントマイシン経口投与困難群14頭の飼い主に對して投与回数が少なく済むアジスロマイシン経口投与を提案した。投与ができた例では効果も観察した。
- ③ 投与困難群の一部をデポ・メドロール注(2 mg/kg)の効果を基準としてインターフェロン(1 MU/head)、コンベニア注(8 mg/kg)の単独、組合せで単回接種し、効果の比較をした。

<結果>

- ① 比較を行った8頭のうち5頭ではどちらの薬剤に対しても効果があった。1頭はアジスロマイシンで

のみ効果があり、2頭はどちらの薬剤にも反応しなかった。

- ② クリンダマイシン投薬困難の猫14頭中6頭で投薬が可能であった。6例すべてで投薬後に効果がみられた。
- ③ 対象とした4頭のデポ・メドロール注の効果持続期間は10~14日であった。同時にインターフェロン単独投与した4頭はいずれも効果は無く、対象のうち3頭にコンベニア注の単独投与した結果は、2例にわずかな効果が見られたが1例は効果は無かった。又、デポ・メドロール注の効果持続時間の延長効果を目的にコンベニア注、インターフェロン注の各々をデポ・メドロール注と併用してみたが、効果時間の延長は見られなかった。

<考察>

経口投与可能な猫に対して非ステロイド製剤2種の薬剤を比較した結果、アジスロマイシンの方がクリンダマイシンより治癒率はやや優れ、投与回数も少なく済むことから、投薬を嫌う場合の第一選択薬として今後検討を重ねていきたい。一方、経口投与困難な猫の一部の口内炎治療においてはステロイド製剤であるデポ・メドロール注による症状緩和の効果は大きく、今回試みたコンベニア注単独での効果は小さい。インターフェロン注では効果は全く見られなかった。デポ・メドロール注の効果持続時間の延長を目的としたコンベニア注、インターフェロン注の同時併用してみたが、どちらも持続時間延長の効果はみられなかった。